

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲医第 1566 号	氏名	川人 圭祐
審査委員	主査 森岡 久尚 副査 栗飯原 賢一 副査 常山 幸一		

題目 Feelings toward medicine in remote areas among medical students aiming to become generalists: A comparison with other specialists
(総合診療医を志す医学生の僻地医療に対する意思について:他の専門医との比較)

著者 Keisuke Kawahito, Harutaka Yamaguchi, Yoshinori Nakanishi, Shingo Kawaminami, Ryo Tabata, Yoshihiro Okura, Kenji Tani
2023年2月発行 The Journal of Medical Investigation 第70巻第1,2号に掲載予定
(主任教授 谷 憲治)

要旨 日本では医師の地理的偏在が指摘されており、僻地では幅広い疾患や複数の合併症に対応できる総合診療医が求められている。2018年から新専門医制度が開始されたが、全国の総合診療専門医の研修登録者数は、2022年には2.65% (9448人中250人)と、制度開始時の期待よりも少ない。医学生の総合診療科の選択に影響を与える要因に関する報告は散見されるが、これらの要因と実際に選択される診療科との関連は明らかでない。
本研究では地域医療実習終了直後の医学生 (2013年から2016年までの4年間に徳島大学医学部医学科5年次に在籍した396名) を対象として visual analog scale を用いた質問紙調査を行い、僻地医療への思い (興味、やりがい、理解度、貢献の意思) について希望診療科別や性別、出身地別による解析を行った。また、卒業後の初期臨床研修修了後に実際に選択した診療科を調査し、学生時代の希望診療科との比較を行った。340名から回答が得ら

れ（回答率 85.9%）、選択診療科が判明した 326 名（82.3%）のデータの解析を行った。

得られた結果は以下の通りである。

1. 僻地医療に対するやりがいは全ての医学生で高く、希望診療科別で差はなかったが、興味や貢献の意思は総合診療科希望者で有意に高かった。
2. 出身地別では、僻地医療に対するやりがい、興味、貢献の意思の強さに有意な差はなかったが、徳島県出身者は他都道府県出身者と比較し、理解度が高かった。
3. 学生時代の希望診療科は内科が最も多く、次いで外科、小児科、整形外科、総合診療科であった。初期臨床研修修了後の選択診療科は内科が最も多く、次いで外科、麻酔科、整形外科、精神科であり、総合診療科を選択した者は、回答 326 名中 5 名（1.5%）であった。
4. 総合診療科を希望していた 14 名のうち変更なく総合診療科を選択した者は 3 名（21.4%）であり、その他は内科へ 6 名（42.9%）、外科、脳神経外科、麻酔科、整形外科、救急科へそれぞれ 1 名（7.1%）が転向していた。

以上より、学生時代における総合診療科希望者の多くは卒業後に他の診療科へ転向していることが明らかとなり、総合診療科の卒後サポートプログラムの整備が必要と思われた。本研究は日本の医学生の卒前卒後の進路変化に関して定量的に評価した初の検討であり、今後の医学教育および総合診療医の育成において、その社会的意義は大きく、学位授与に値すると判定した。